

受験番号	
------	--

平成29年度大阪府・大阪市公立学校教員採用選考テスト

高等学校(世界史) 解答用紙 (2枚のうち1)

5

得点	
----	--

--

(1)	ア	ヨーロッパにもたらされる胡椒や香辛料は紅海やペルシア湾を経る航路を使って西アジアに運ばれ、 <u>地中海</u> を経てヨーロッパに運ばれていた。ポルトガルは喜望峰経由で胡椒や香辛料を持ち帰り、独占的に売却することで巨額の利益を得ようとした。1498年にポルトガル国王の命を受けたヴァスコ=ダ=ガマが喜望峰経由でインド航路に到達し、それ以降ポルトガルが香辛料貿易を独占した。		/		
	イ	現在のオランダが位置する低地地方(ネーデルランド)はスペインの支配を受けていたが、1568年にスペインからの独立を求めてスペイン国王に対して反乱を起こし、それ以降オランダとスペインは戦争状態が続いていたから。		/		
(2)	ア	バタヴィア	/	イ	ゼーランディア城	/
	ウ	2	/	エ	平戸	/
(3)	ア	17世紀以降のイギリスでは、インド産綿布(キャラコ)が急速に広がり大量に輸入されていた。18世紀のイギリスにおける産業革命によって綿布が製品化されると、インドからの輸入品は綿花などの第一次産品に変わり、イギリスの機械製綿製品がインドに輸出され、インドの農業社会や手工業を大きく変質させた。			/	
	イ	カーナティック戦争			/	

--

--

--

受験番号

平成29年度大阪府・大阪市公立学校教員採用選考テスト

高等学校(世界史) 解答用紙 (2枚のうち2)

5 (続き)

<p>(4)</p>	<p>「茶条例」とは、東インド会社がイギリス本国を經由せず北アメリカ植民地に直接茶を持ち込んで独占的に販売する権利を認めたものだが、植民地の人々にとっては、そもそも植民地へ輸入される商品にかかる税額をイギリス本国が勝手に決めること自体が許せないものであり、また、必ず東インド会社から茶を買わねばならないという独占販売も問題であると考えられたから。</p>
<p>イ</p>	<p>A の資料で提唱された自由貿易の考え方は、19 世紀前半のイギリス政府の政策となった。東インド会社は 1813 年にインドとの独占貿易が終了し 1833 年には商業活動が全面的に停止され、以後、インドの統治機関として存続した。東インド会社は、傭兵 (シパーヒー) を使って軍事的に支配権を拡大し、19 世紀半ばには、インド征服をほぼ完成していた。1857 年にそのシパーヒー (セポイ) が資料 B にある宗教上のタブーに触れる指示をきっかけとしてイギリスの統治に対する反乱を起こした。反乱は各地に広がり、イギリスは本国から軍隊を派遣して鎮圧した。イギリスは反乱を深刻に受け取め、東インド会社は責任を取る形で解散した。</p>